インド西部の静かな村を地震が襲いました。村々の建物やお寺、学校、そして皆の笑顔を、一瞬で奪ってしまいました。

私が訪れたのは地震から約１年後。なす術もなく、村は事故当時のまま…子どもたちは裸足で釘や鉄骨の上を歩いていました。

そんな中でも村人は生きている。皆、強いです。特に女性、そして母はとってもたくましい。廃墟にあっても、明るい笑顔で私たちを迎え入れてくれました。

村の再建工事が始まりました。
今までの村から少し離れた場所に新しい村をつくります。
鉄骨とコンクリートのシンプルな家。一棟建てるのに、日本円でおよそ9万円だそうです。

作業員の多くは、出稼ぎ労働者。インド全土から来ていました。家族連れで働きに来ている人も多く、建設中の家の中で、真っ白になって寝泊まりしています。

道路やコンクリートの材料となる石を運ぶのは主に女性の仕事。幼い子どもの手を引き、さらに身重の体のお母さん。もう臨月なのに…。それでも彼女は、明日のため、子どもたちのために働かなければなりません。

働く親を待つ子どもたち。妹や弟の面倒を見つつ、作業現場が遊び場です。裸足で走りまわる毎日…危うくサソリに噛まれかけた子どももいました。

この子はまだ１歳。作業現場で歩けるようになりました。服も食事も満足になく、母親に抱っこしてもらえる時間も少ない。そんな中でも、大好きな親の姿を見て、見よう見真似で自分も土をすくうのです。

小さいお碗に少しの砂が入りました。
それをよちよち歩きで運びます。
歩く先からポロポロこぼれて行くけどお構いなし。お母さんたちのお手伝いに一生懸命です。

服よりも遊びよりも、”生きること”

貧困とは何か…。

１歳の彼が、背中で語ってくれているような気がしました。

この子は２～３歳くらい。騒音と砂ぼこりの中、お母さんとはぐれてしまいました。

泣いても皆、仕事の手を止めません。ここの子たちは、家族も自分の居場所も、自分で見つけるしかないのです。